

平成 30 年度 第 2 回

早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会

会 議 次 第

日時：平成 31 年 3 月 28 日（木）

15 時 30 分～

場所：早稲田大学

早稲田キャンパス 9 号館

第一会議室（5F）

1. 開会・あいさつ

2. 議 事

(1) 前回評価委員会議事録の承認について

(2) B 地区におけるモニタリング調査結果について

(3) A 地区陸上競技場照明施設の環境アセスメントについて

(4) その他

3. 閉 会

平成 30 年度 第 2 回早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会

日時：平成 31 年 3 月 28 日（水）15 時 30 分～17 時 30 分

場所：早稲田大学 早稲田キャンパス 9 号館 第一会議室（5F）

出席委員：A 委員長、B 委員、C 委員、D 委員、E 委員

1. 開会・挨拶

○評価委員会事務局（F）：皆様お待たせいたしました。「平成 30 年度第 2 回早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会」を、開催させていただきたいと思います。いつもでしたら大隈会館をお借りしているのですが、今日は若干雰囲気が異なる 9 号館をお借りしています。だいぶ春めいてきて、おそらく所沢キャンパス B 地区もコブシの花が咲き終わって、これからヤマザクラが咲き始め春爛漫の時期を迎えると思いますが、例年、年度末にこういう形で議論させていただきまして、また今年度も年度末のお忙しい中お集まりいただきました。ありがとうございます。議次に先立ちまして、早稲田大学の G 総務部長からご挨拶いただきます。

○早稲田大学総務部長（G）：ただいまご紹介いただきました、早稲田大学総務部の G でございます。本日は年度末の大変お忙しい中、評価委員の先生方にはご出席を賜りまして厚く御礼申し上げます。「早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会」は通例年 2 回という形で行われておりまして、今回はこの早稲田キャンパスで、ご審議いただく機会ということになります。本日は前回の評価委員会以降の調査結果と取り組みについてご審議をいただきまして、その中で先生方のご経験、ご専門のお立場から、今年度の総括と来年度の方針について、ご提言を賜ればと存じております。また本学は、埼玉県・所沢市とともに 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックにつきまして、イタリア代表選手団の事前キャンプ地として、所沢キャンパスの施設を提供することについて、イタリアオリンピック委員会と合意に達しております。本日の委員会では、その際の環境保全対策につきましても、委員の先生方からご意見を頂戴できれば幸いです。本日は、何卒よろしくお願い申し上げます。

○評価委員会事務局（F）：G 総務部長ありがとうございました。本日は、5 人の委員の先生方がみなさんお揃いになっております。最初に資料の確認をさせていただきます。会議次第、前回の評価委員会議事録、自然環境調査室の H さんによるモニタリング

調査結果の資料が一つ、それから水質調査結果を環境保全センターから出していただいています資料、それと埼玉県生態系保護協会によるモニタリング調査結果、ただいま G 部長からお話がありました、来年の東京オリンピック・パラリンピックの照明に関する確認書の関連の資料も付けてございます。お揃いでしょうか。それでは議次につきましては、A 委員長にお願いしたいと思います。

2. 議事

(1) 前回評価委員会議事録の承認について

●A 委員長：お忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。もう大学では、卒業式は終わられたのですか？

○早稲田大学自然環境調査室 (H)：はい、今週のはじめに終わりました。

●A 委員長：先生方もほっとされているところですが、すぐに新年度が始まるのでお忙しくなると思います。私は昨年、定年退職したのでそういう忙しさから免れまして、のんきにしております。どうぞ、よろしく願いいたします。それでは議事次第に従って進めていきます。前回の委員会の議事録承認ということですが、事前に委員のみなさまに郵送されていますので、何か問題点がございましたらご指摘いただけたらと思います。いかがでしょうか。よろしいですか。

○評価委員会事務局 (F)：議事録の最後 17 ページのところですけども、所沢市役所で前回出席していただいた L さんが記されていますが、県の「環境部みどり自然課」で M さんも、本日はお休みですが出席されていました。今日先ほど気づいたので変更していただけたらと思いますが、所沢市役所のところを「所沢市みどり自然課」です、ね、課の名前を入れた方が良いと思います。本日は、K さんがお見えになっていますが、「所沢市みどり自然課」で、みどりはひらがなです。埼玉県と同じ課の名前です、ね。所沢市みどり自然課 (L) さんで、修正させていただけたらと思います。

●A 委員長：ありがとうございます。そこのところ以外は問題ないということで、ご承認いただいたということに致します。よろしく願いいたします。それでは本題に入ります。

2 番目の議題になる B 地区モニタリング調査の結果についてですが、自然調査室

とそれから環境保全センター、埼玉県生態系保全協会の3点ございますが、時間の関係で今日は一括してご説明していただいた後に、ご意見等承りたいと思いますので、よろしく願いいたします。それでは、ご説明お願いします。

(2) B地区自然環境モニタリング調査の結果について

- 1) 早稲田大学自然環境調査室 (H) : 説明省略
- 2) 早稲田大学環境保全センター (I) : 説明省略
- 3) (公財) 埼玉県生態系保護協会 (F・J) : 説明省略

【質疑応答】

●A 委員長：ありがとうございました。盛りだくさんの内容をご説明いただき時間をとりましたので、多くの時間の議論できるわけではございませんが、最初に、自然環境調査室のご説明に関して、ご意見等伺っていこうと思います。いかがでしょうか。

●B 委員：カヤネズミの巣が2個だけとは驚きで、今期はススキの創生地区に人の立ち入りがあったのかなと考えたのですが、B地区全体的で2つということで、それだけでは説明できない。イエネコの影響も考えられているということで、イエネコの影響について他のネズミにも影響が出ているという話がありましたが、その辺をもう少し詳しく、どういうネズミにどういうふうに影響がでているのか教えてください。

○早稲田大学自然環境調査室 (H)：まず一つはヒアリングによるもので、B地区の観音堂の斜面上側に竹林や常緑樹林がありますが、そこで人間科学部の研究室でアカネズミの捕獲調査をしていた学生がおりました。その彼は、学部からB3・B4・M1と研究を続けたのですが、最初の2年に比べて、M1となった1年が明らかに捕獲数がおかしいと感じていました。同時にそのフィールドに出た際のネコを目撃回数が増えている状況でした。それでネコとネズミの捕獲の関連性を疑い、彼は早々に調査地としてB地区を引き上げ、秩父の方に調査地を変えろといった事例が5年程前にありました。そしてもう1点は、戸田ヶ原の湿地、戸田市の荒川河川敷の湿地ですが、そこでも猫が半野生で飼われているというところで、そこでは実際フン分析をしたところ、アカネズミの上あごの部分に混じっていてやはり食圧というのが少なからずあった、という修士論文が今年出ました。その他、アメリカの論文で、イ

エネコが鳥類や小型哺乳類の生息に大きな影響を与えているとの論文もあり、また、ご相談させていただいた方からもネコの関与についてご助言いただいて、総合的に判断しております。

- B 委員：ありがとうございます。ミヤマシラスゲにも巣がないということで、湿地までネコが入って捕食しているのか疑問なのですが、巣を作る以前に減ってしまっている気もしますね。この結果を見る限り、かなり危機的な状況だと思いますが、何か対策とか考えられていますか。夏の営巣調査は、今はやっていないのですか？

○早稲田大学自然環境調査室（H）：夏については立ち入りの調査、草むらの中に入るようなことは、カヤネズミを含めた生息環境への影響を考慮して行っておりません。刈り払いについても、全体エリアの中心部分については繁殖期が終わった冬のみ刈っています。実際の対策としても放置がいいのかどうか、難しいところではあります。カヤネズミの営巣に必要な環境としては、まず一つは営巣をするための植生で、もう一つは採餌をする場所の二つを考えています。今までの定義としては、営巣場所としてはミヤマシラスゲ、ススキ、オギの三つが中心であるとし、採餌場所については、その三つにヨシを加えた群落の中で採餌している、というような位置づけで考えていました。ススキ、オギ、ミヤマシラスゲ群落は、先ほどの植生の調査結果の報告にもありましたが、それほど大きく減少しているということはありません。ヨシについては、毎年刈り取りと搬出を行うことで、枯れたヨシ等が残らない良好なヨシの状態が成立しているということで、植生管理上の問題よりも何か外的な要因があるのではないか、という判断に至っています。

- B 委員：ありがとうございました。時間がないので、カヤネズミがとても心配ということを書いて終わりたいと思います。

●A 委員長：他にはございませんか。どうぞ。

- E 委員：モニタリングのご報告ありがとうございました。オオムラサキの幼虫調査も、埼玉県側に比べて東京都側はオオムラサキが多くて、コムラサキもだいぶ違うので、少し気になっています。来年度は、東京都側の狭山丘陵についても調査等時期を合わせて、2回、12月と1月に実施して減り方をみるとか、調査条件も揃えて

調査してみたいと思っています。オオムラサキの成虫が飛ぶ姿も、B地区ではほとんど飛んでいない。まあ、自然界ではそうなのかもしれませんが、それにしても数が違いすぎる。早稲田さんで調査する日程を教えてください、それに近い時期に東京都側でも同時に調査できれば、比較が可能になるので今後してみたいと思います。

それからカヤネズミの方は、営巣環境の変化をまず考えてしまうのですが、それが変化ないと考えるのならば、イエネコの問題もあるのかなと思います。カヤネズミの場合、ライントランセクト調査は100かける2ですよね。そのルートの上にならべていくのが普通の調査方法ですが、そういう湿地の中に踏み込んで調査しているのでしょうか。

○早稲田大学自然環境調査室(H)：われわれが行っている調査方法は、全域踏査となります。全ての草地のなかに入っていくという調査です。調査者の調査精度については個人差が多少ありますが、調査自体は非常にシンプルですので、ほぼ網羅的に確認できていると考えております。草地や湿地の中に入っていく時期についても、今回、調査初日は11月26日ですが、ほぼ繁殖期が終わる12月以降で実施しており、調査そのものが個体や営巣に影響を及ぼしているとは考えておりません。

●E委員：ありがとうございました。やはり猫の問題も含めて考えていく、ということですね。

○早稲田大学自然環境調査室(H)：はい。先程までに申し上げた通り、まず外的な要因の何かが影響を与えている可能性が高いと考えております。

●E委員：ありがとうございます。うちの方の池でも野良猫がいて、すくっているのを見ているので、ちょっとそんな影響を感じました。ありがとうございました。

●A委員長：ありがとうございました。ネコ問題は各地で深刻化していますが、今後の状況を見守るということにしたいと思います。他に何かございますか。

●C委員：どんなふうに進んでいるかわからないのですが、話を聞いていて感じる部分ですが、B地区の位置づけ、B地区の価値というのが、大事であると思うので

す。例えばその地域で希少種を保全するとか、生物の多様性を維持するという、生物の種の観点からとても希少な場所であるという位置づけも一つは重要でしょうし、もう一つは前から言っているように、B 地区は大学の中にある場所なのでそれをどのように有効的に利用するか、ということが必要になってくると思うのです。ある意味十何年もやっているところであれば、モチベーションをどう維持するか、あるいは変えるというのか、少し意識を変えて、それはわれわれ委員もそうなのかもしれないし、そこで作業している人たちもそうだと思うのですが、ちょっと違う意識でもって、B 地区をどうするのかというところを議論して良い時期に差し掛かっているのかなという感じがします。こういう話をするのは、私はあと3日で定年になりますけども、はたして10年先を見据えた時に、H さんの方からグリーンインフラという話があって、他の地域でもこういうことをやっている。E さんも東京都側でも同じ時期に調査をやろうよと仰っている。今まではわりと近場の所沢とか、この周辺を中心にして多様性がどうだとか、いろんな人を巻き込んで有効的にやっていこうとかが取組まれてきた。それをもう少し広げてみるというのも一つの方法だろうし、他にもいろんな議論があると思うのですが、そういう時期に達しているのかな、という気がします。なんとなく大学がこうしたいぞと考えた時に、それに対して良い意味での抵抗ができなくなってしまうということが、僕は起きるのではないかと。そういう意味でも非常に意味重要な時期にきているのかな、という気もします。それにはもう一つ大学側がこの取組みに対して、人的それから資金をここにかけていけるんだってこととリンクしてくると思うのです。こういう場所でキチッと良い成果を上げて、世の中に積極的にアピールできるようにするには、やはり人的な保障とお金のサポートが無いとできない。一番大事なのは、取組んでいる人をキチッと維持してやっていくことが大事だと思うのです。そういうところの議論も、あまり堅苦しい感じではなく、気楽な感じで自由に意見を述べられるような意見交換もあつたらいいのかな、と思います。ちょっと最後になり、余計なことをということになるかもしれませんが、以上です。

●A 委員長：ありがとうございました。D 先生。

●D 委員：今、C 先生もおっしゃったことは、私も同感でございます。もちろん長いこと B 地区の湿地保全活動をずっと続けてこられたということで、とても頭の下がることですが、せっかく大学のご尽力で保全されているエリアなわけですから、活

用ということをさらに積極的に考えられた方がいいのかなと。その場合、活用といっても保全しながらの活用ですので、単なるレクリエーションではなく「環境教育としての場としての活用」なのだろうというふうに、私は思っています。前回の議事録をみたり、思い出したりして自然環境調査室の方にも私も個人的に問い合わせなどさせていただいたのですが、やはり水田を作ってそれを耕作放棄をすると数年間ぐらいは生物多様性が大きくなる、という調査結果があるということ。それから今回、埼玉県生態系保護協会の報告でも、攪乱すると埋土種子との関係もあると思うのですが、生態系が豊かになるという話があって、やはり人為的なアプローチをしていく中で生態系が豊かになるという明らかなモニタリング調査が得られていますから、やはりこうしたあまり周知されていない知見を環境教育の場として広く活用していただきたい。特に社会的な評価が得られる幅広い市民参加を視野に入れて、もちろん当初は学内の学生参加からなのかもしれませんが、周辺の所沢市エリアの市民参加とか、場合によってはもう少し広いエリアのところからもうまく参加を募りながら、環境教育の場としての活用や保全管理活動を進めていく工夫ができれば素晴らしいかなと、私としては大学の社会貢献のあり方として期待したいなというところがあります。前回の議事録をみると、シンボル種の話をしているのですが、シンボル種をどう選ぶかよりも豊かな生態系がまるごと残されていて、狭山丘陵全体の中でも早稲田大学の敷地は非常に重要なところで、狭山丘陵の環境や生物多様性を代表する全国的にも誇るべき場所でもあるということで、生態系そのものをシンボルとした形での環境教育の場、保全管理活動のモデル地区としての価値を深めていくことができるのではないかと各先生の意見やモニタリングの報告を聞いて、改めて思いました。

- A 委員長：ありがとうございました。それでは、環境保全センターのIさんからのご説明もありました水質に関して、何かご質問ございますか。例年とあまり変わらなくて、今後も同じ傾向がみとめられるだろう、というお話ですが。難しいかも知れませんが、どうして例年こうした傾向が出るのか、という部分の解析は可能なのでしょうか。

- 早稲田大学環境保全センター (I)：コメントありがとうございます。正直なところ、われわれもそこに関しては難しいな、と捉えています。と申し上げますのも、前日に雨が降ったり、また雪が降った場合で、水質がかなり変動しやすいところもありま

して、一概にこのデータから何か結論といたしますか、考察を導くというところは現状難しい、というのが正直なところです。

- A 委員長：今おっしゃられた直前に気象が変わったとかいうのは、調査条件との関係があるように思います。そういうのは、このデータが悪化した日にちですか。その直前、直前に動きはあったのでしょうか。

○早稲田大学環境保全センター (I)：ある場合もあります。イメージですが、干上がって水が乾いた状態に近くなりますと、相対的に全窒素などが高濃度になりやすいなど、そういった傾向は体感的な知見として持っております。

- A 委員長：ありがとうございます。それでは、最後の報告である植物に関するご説明に関して、ご意見ご質問よろしく申し上げます。私の方から図表の補足をしていただきたいのですが、9ページ辺りですが2007年と2018年の比較で、それぞれの植物の分布が図示されていますが、2007年の方は塗りつぶしの形の時に近いことになっていますが、この辺は差があるのでしょうか。

○埼玉県生態系保護協会 (F)：両年の植生の分布状況は、だいたい同じ所であったということ以上にあまり意味はありません。表記の仕方が2018年の凡例の方が、より詳細になったというだけです。

- A 委員長：そうですか。同じレベルの詳細差で表記しているので、部分的に消えたり増えたりとの違いが生じたとは読めないのですね。了解しました。

- D 委員：攪乱試験としてヨシの抜根をされていますよね。これは、さっきの話とも繋がるのですが、調査者の方が関わるような内容になってきますか。それとも、こういうところでもある程度、学生とか市民とかの力を活用することが検討できるのでしょうか。

○埼玉県生態系保護協会 (F)：資料の2ページのところに、この試験や対策の全体の取り組み目標や活動テーマを整理したものを載せさせています。今の試験や管理作業では、希少種等との対応関係等をより明確にすることに重点を置いて進めています。ただ最終的な目標は、この方針に示されているとおり学生ですとか、市民参加を想

定し省力的な管理方策の確立を目指した、生物多様性の維持・改善を可能にすることに目標を置いています。現時点では、調査員・作業員が行っているのですが、将来的には対応関係がある程度明確になったら市民や学生の参加で作業を行い、こういう生き物が復活したとか増えたとかの成果が実感できるような所までのマニュアル化ができれば、一番良いゴールになると思います。

- D 委員：ぜひ調査のプロセスでマニュアル化も目指しながら、対応関係をはっきりさせることができれば、市民参加を広く募るきっかけができることにもなると思います。そうすると B 地区の活用という話も、現実的になりけっこう深まっていくことになると思いますので、期待したいと思います。ありがとうございます

○早稲田大学自然環境調査室 (H)：補足ですが、実際写真で2名の方が作業をやられているのですが、ヨシの抜根はものすごく労力がかかっております。以前市民の方々と実施したことがあるのですが、20人が3-4時間かけて田んぼ一枚ぐらいがどうにか根がとれるという労力量です。ですので今は、お金を払ってアルバイトの学生がやっているのが現状です。さらにその前は、機械を入れてやっていました。湿地に重機を入れるのは悪影響が大きく、現在はもう実施しないという方針で現在はやっておりますので、現状は人力のみです。もし今後ボランティアで行うのであれば、抜根作業だけで単発に終わるイベントではなく、前後で例えば田んぼを作ってお米を作って収穫できて、というストーリーの中で、ちょっと辛い作業もありますよというような位置づけが必要になってくるのかなと思います。

- A 委員長：現実的な話をしていただき、ありがとうございました。

- C 委員：先ほど D 先生がおっしゃられたように、環境教育の場というところで、それでもう一步踏み込むと大学で、この環境に関わるような教育をしている私は生物学教室にいるので関係するのですが、もう一方強い事を言うとしたら、他にも所沢キャンパスにいるわけですね、先生方が。その辺のところを、どういうふうに考えるか。僕は辞めるので何でも自由に言えますが、所沢に住んでいるのだから、その辺のところをもう少し考慮しながら色々なことができるのではないかと。僕が現役の時、口が裂けても言えませんが、現役終わりますので。早稲田でちゃんとお飯食べさせてもらっているわけですから。所沢のここにこのように大学ができるにあ

たっては、僕は最初のところから知っていますが、色々な方たちとどのように開発するかの問題がすごくあって現在こうなると。そういう状況の中で、少なくとも生物学なりなんなり関わっている先生方がいるわけで、その方たちともうちょっと、良いかたちで議論できないか。学内問題でもあるので、ここでわれわれが今、議論していてもしょうがないのですが、教務部の管轄でもなくなってしまったというところもあって、少なくとも部長ぐらいしてもらえると助かったのですが。実は。その辺がもう少しフランクな形で話し合いができればいいなど。もっと言えば、委員の先生に、またはそちら側でもいいと思うのですが、所沢の先生方にも入ってもらう形になっておれば、もうちょっといい形で、ここを活かせるんじゃないかと、常々思っていました。そういうことです。

●A 委員長：ありがとうございます。いかがでしょうかね。

○早稲田大学自然環境調査室（H）：C 先生が今おっしゃられているのは、長年のこういった議論が、実際のところ学内の議論にどこまで落とし込まれているかということが、なかなかこの場では見えづらい、というところをご指摘頂いていると思います。学内の議論の結果がどうなるかはまた別のところにあります。そこへ向けて自然環境調査室がしっかり学内の中で責任を背負っていく必要があると思っています。

●C 委員：その辺に関しては、総長が代わって田中さんはやはりその辺の部分はどういうふうになるかわからないけど相当気にしているので、僕も個人的にはそういう話もして、今までの体制とはずいぶん違う形になる可能性もある。ただ、色々な可能性はあると思うので、そういうところでうまく活かせるような形で、例えば学生にどう参加してもらおうとか、初等教育などもあるわけで、理科の先生になる子達もいるわけです。そうしたプログラムをうまく入れるとか。色々な知恵を出し合って、その辺を自由に議論できるといいなと思います。

●A 委員長：ありがとうございます。他に、何かありますか。

●B 委員：C 先生が言われたことは、私たち委員も常々思っていることで、今、言われて大変ありがたいという思いで聞いていました。早稲田大学のホームページをみて

も、国際的な環境の取り組みはずいぶん書かれているのですが、所沢キャンパスで行われている取り組みの扱いはほぼ無いと言っている。これだけ色々な成果をあげているのに、大学の取り組みを大々的にアピールしないのは本当にもったいないなあ、という思いをいつもしています。今、国会でも里山保全が希少生物の生息場所としても里山の保全や再生をしていこうということが、国会でも付帯決議で議論されていると聞いています。このことをもってしても、所沢校地 B 地区の取り組みにやっと国会が追い付いて来たのかなという感じがしています。だから大いに早稲田大学によるこの取り組みが、広く評価されるべきだと。特に、大学の中でも評価されるべきだと思いますので、先生が言われたことを大変ありがたく聞きました。

- A 委員長：それでは最後の A 地区陸上競技場のライトアップについての資料を、ご説明ください。

○評価委員会事務局 (F)：手元の資料で、照明施設に関する確認書(案)がございませう。前回の所沢キャンパスでこの委員会をやった時、現場を見ていただいた時の話の続きになるのですが、今、C 先生からもお話がありましたように、この場所については様々な関わりを経て、A 地区と B 地区の両地区がキャンパスの整備という状況になっています。資料の一枚目の①にあります、地元の自然保護団体と早稲田大学で夜間照明に関する確認書ということが、1992 年に取り交わされていた経緯があるものですから、それを踏まえて来年のオリンピック・パラリンピックの夜間照明についても対応していくことになりました。具体的には、昨年1月以降この3月20日に至るまで5回ほど所沢市役所で、早稲田大学と連絡会議、トトロ基金、埼玉県生態系保護協会、そして所沢市も加わり協議をしてきました。結論として、1枚目にあります確認書(案)の中にある通り、前回の委員会で現地を見ていただいた陸上競技場の奥に湿地があってホテル等への影響が懸念されることがあります。そこで、この確認書に記されている内容の対策を講じていきたいと思います。特にこの評価委員会との関係の中では4番にありますが、影響を少なくするための環境アセスメントの取り組みとして進めていくわけですが、その場合の最終的なアセスメントの評価・検証については、この委員会はそもそもが B 地区を対象としているのですが、この件に限ってこの委員会の場で最終的な評価・検証も担っていければ、ということです。さらに具体的には、この確認書には別紙の A3 の用紙がついているのですが、アセスメントの内容について、それぞれの関係主体が役割分

担を担い検討していきましょう。一般的には、アセスメントは開発事業者がコンサルタント等に委託して、調査や対策等を実施して、それに対して様々な意見をもろう形になるのですが、ここについてはアセスメントの手続きを踏まえるものの、実際には別紙の右にある先ほど話した関連主体である早稲田大学、連絡会議、トトロ基金、埼玉県生態系保護協会、評価委員会、所沢市が記されていますが、それぞれが役割を持って、いわゆる協働してアセスメントを進めていきましょう。そういう中で影響の軽減を図ると共に、合意形成も進めましょう、ということになっています。この確認書(案)の中身をなるべく早いうちに詰めて正式な調印をしましょう、という段階になっています。

中身を簡単に説明させていただきますと、大きく1.と2.があります。1.は経緯を整理する。2.は直接的にはそもそも照明対策が必要とされていますが、その照明対策について、現時点では対策の限界、見通しが予測不透明なところがあるので、周辺環境対策という、アセスメントでいうところの代償対策という位置づけになるのですが、それぞれ葛入り湿地、ホテルがいるところ。それと湿地をとりまく周辺緑地が墓地で開発される計画があったのですが、トトロ基金の働きかけでそこが公有地化されまして、所沢市も「里山保全地域」、条例の指定地を拡大することもありますので、湿地とそれをとりまく荒廃緑地について、ハードあるいはソフトの対策を講じて、より良い環境を整備するために取組んでいきましょう、そういった全体の流れになっています。この評価委員会は年2回ですので、次回の秋にはどのような取組みが進められているのか、ということの進捗を報告させていただいて、それに対するご意見いただけたらと思います。

●A 委員長：何かご質問ありますか。現状ではどのような対策内容が検討されているのでしょうか。

○早稲田大学自然環境調査室 (H)：先ほどの確認書(案)については、まだ締結までは至ってないのですが、その中で謳われている環境対策は実際どういうものなのか、ご説明いたします。A 地区の照明対策としては、陸上競技場の南東部に向かって照明の光が直接湿地に入ること、この直達光をどうするか、ということを中心に考えています。具体的には合板壁を建てて、その裏の部分に合板壁の高さを超える植栽をして、遮蔽範囲を上乗せする。そういった対策で、直達光を防いでいく案を考えています。ここに至るまでには実際には多くの議論がありまして、照明を付

ける、付けない、もしくはその照明の光源を変えられるか、変えられないか。そういった議論を経た上で、本学としては照明そのものの部分ではなくて直達光対策を中心に考えさせていただきたい、という内容をお伝えさせていただいています。現状、まだ合板壁は建てておりませんが、植栽については、1m から 1.5m ぐらいの密植した状態で胴回りが 40cm、直径が 12・13cm ぐらいのシラカシを植えています。これは業者の方に個人的にも依頼して、徒長した葉が広がっている木をあえて植えており、多少でも光の防止策になればという視点で植えております。以前ありました隙間の部分につきましては寒冷紗をかけて対策を行います。以上のことを実際に行ってみて、どのぐらい湿地の中に光が漏れるのかどうかについては、この夏に試験点灯を行い、確認して参ります。以上のことを総合的にご検討いただければと思っております。

- A 委員長：ありがとうございました。この件について、質問やご意見はありますか。なければ、それでは一番最後のその他のところで、今日は埼玉県の方は欠席ですので、所沢市役所の K さん何かコメントいただければ。よろしくお願ひします。

○所沢市みどり自然課 (K)：所沢市役所みどり自然課の K と申します。本日は貴重な調査活動お話、拝聴いたしましてどうもありがとうございます。この場をお借りいたしまして、本市の事業 2 点ほど紹介させていただきます。1 点目は、緑の保全消失に関する総合計画になります「緑の基本計画」をこの度改定いたしまして、4 月 1 日から第三期の基本計画がスタートすることになっております。この中で以前と同様に、所沢キャンパスを含めた狭山丘陵一帯につきましては、保全を図るべき重要な地区として位置づけまして、引き続き緑地の保全制度の指定を進めることによりさらなる保全に努めてまいりたいと思っております。もう 1 点が、31 年度から 32 年度の 2 ヶ年をかけまして、「生物多様性ところざわ戦略」の策定を進めてまいります。そういった中で、今日お伺いいたしました早稲田大学さんの取組みは、所沢市の生物多様性を確保する中では大変重要な活動になりますので、ぜひ戦略の策定に際しまして連携を図らせていただき、またご指導いただきながら、策定の方を進めていきたいと思ひます。今後とも、よろしくお願ひいたします。本日はありがとうございました。

- A 委員長：ありがとうございました。私も、各地の生物多様性戦略に関わっております

ので期待しております。長時間に渡って、委員会の運営にご協力ありがとうございました。これで全ての内容を消化したということで、進行お返しいたします。ありがとうございました。

○評価委員会事務局（F）：長時間に渡りまして、ご議論いただきありがとうございました。本日も、様々にご検討とご意見をいただきました。さらに具体的な展開としましては、所沢市みどり自然課から、最後にお話がありましたが、おそらく所沢市全体としても狭山丘陵に位置する所沢キャンパスエリアの生物多様性の学術的な観点からの重要性のみならず、長年の調査研究の積み重ねや学生や市民との連携も含めた保全管理活動の実績について、公的な評価を得て戦略に示されることになるのではないかと予想されます。実は、埼玉県内では市町村レベルで生物多様性戦略を策定するという事例はまだ 2 つしかないです。そういった意味では、所沢市に積極的に取り組んでいただいています、早稲田大学のB地区での取り組みも、市の行政計画における新たな連携ということを踏まえながら、次のステップへの展望が開けるのではという期待も感じております。次回は、秋ぐらいに現地を見ていただいてご意見いただくということになると思います。本日は「平成 30 年度第 2 回早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会」に、ご協力いただきましてありがとうございました。これにて、委員会を終了させていただきます。

以上